

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

勝池レポート      アジア資産運用アドバイザー 勝池和夫

「中国恒大集団の経営危機に思う」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

中国不動産大手の中国恒大集団の債務危機が世界の株式市場を揺らしています。30兆円を超えると言われる同集団の債務がデフォルトに陥り、それが中国バブル崩壊の引き金になるのか、世界を巻き込む中国版リーマンショックに発展するのか、この難題に対する中国政府の出方が注目されています。

この問題を楽観的に捉えるのは難しいですが、一つ言えることは、日本のエコノミストや中国専門家などの中国経済に関する見通しは、長きに亘りほとんどすべて間違っていたということです。彼らが声高に叫び続けたバブル崩壊も人民元の急落もシャドーバンキング問題も、現在まで深刻化はしませんでした。

それどころか、そんな悲観的な意見が大勢を占める中、中国経済は誰もの予想に反して2010年に日本経済を追い越し、現在は日本の3倍になるまでに発展しました。そして昨今では、英国の民間調査機関が中国経済は2028年にはアメリカ経済をも上回ると予測するまでに至っています。

極めて重要な中国経済の見通しが、このように大きく外れた要因を一切検証しないまま、今回の恒大集団問題を「それ見たことか」と言わんばかりに無反省に、再び悲観的に捲し立てる識者やメディアを私は全く信用していません。

中国経済は鄧小平の「先富論」が大発展の始まりでした。しかしそれは行きつくところまで行って、大きな格差や環境破壊を残しました。不動産の高騰ももはや放置はできません。習近平の「共同富裕」を目指した政策は、確かに不動産企業の経営難を引き起こし、それに電力不足も相まって中国経済は短期的に減速傾向を強めると予想されます。しかし、それは中国という国を長い目で捉えた場合、社会の安定のために避けて通れない苦肉の策なのかも知れません。

今月8日の日経に、中国経済の「グリーンテック」についてのコラムがありました。中国の不動産主導の成長から、グリーンテクノロジーに頼った成長への移行の可能性についての英 FT のグローバル・チャイナ・エディターの意見です。「もし中国がグリーン目標の一部でも達成すれば、世界を驚かせるし、地球を救うことになるかもしれない。」と結んでいます。今回の不動産会社の経営問題の背後には、このような意外な中国の長期的な戦略があるとも思えます。

私は以前に中国企業の調査で西安（昔の長安）を訪れた時、面白い言葉を聞きました。「中国の50年の歴史を知りたいければ上海に行け。500年だったら北京に

行け。5000年を知りたければ西安に行け」。とても示唆に富んだ言葉です。習近平の生まれは西安が所在する陝西省です。ひょっとしたら、現政権の様々な規制の裏には、中国の5000年を踏まえた壮大なグラウンドデザインがあるのかもしれないと感じています。短期的な狭い視点では、見誤りやすい国のようにです。